月刊スクールアメニティ　1985年12月15日創刊　2013年7月20日 発行（毎月1回20日発行）　第28巻第8号（通巻329号）　ISSN 0919-9632

School Amenity

8
Vol.28/No.329
2013
voi-x

New Face21

小学生と中学生、子どもと大人、学校と地域、が「つながる」小中併設校舎

日進市立竹の山小学校・日進北中学校（愛知県）

地域活性化の拠点として整備された複合施設

守山市立守山小学校・守山幼稚園・あまが池プラザ（滋賀県）

特集 サスティナブル社会に受け継がれるまなびやを その3
命を守るまなびやづくり

LIFE-LONG LEARNING SPACE
生涯学習空間

話題を追って

企業は環境教育を通して何を伝えるのか

Future Green Networkという活動が始まった。企業の他、NPOなど非営利団体や学校関係者が、それぞれの組織の内外で行っているさまざまな活動に対して、組織単独では難しいことでも、さまざまな組織がそれぞれの持つ強みを持ち寄って行動すればより大きな流れを生むことができるのではないか、と今年発足したばかりのネットワークである。

企業主体の環境教育活動

環境教育推進研究会（仮称）として今年1月から活動を始めて、4月から現在の名称となった。活動の目的は“環境”であり、その対象は学校教育、子どもを対象としたものにとどめず企業内での環境教育にも及び、各参加組織が連携して環境教育の知識と知見を共有・実践し、環境問題の理解や環境配慮行動ができる人材、ひいては専門家やリーダーの育成を目指している。その中のワーキンググループの1つが、対外的な環境教育についての研究を行っており、その集まりが7月5日に丸の内の東京海上日動ビルであった。

7月5日の活動の様子

対外的な環境教育を学ぶ

対外的な環境教育の実態を研究するチームでは、地域の子ども達に対して行われている環境教育の実践を知る機会と他チームにも呼びかけた。実際に東京都町田市の市立つくし野小学校で既に8年目の活動となっているビオトーププロジェクトの代表を務める(株)松田平田設計の小池常雄さんが、集まったメンバーを子ども達に見立てて、実際の活動の一端を実演した。このプロジェクトは現在、ほぼ月に一度、同校と周辺の環境を活動場所に、子ども達に自然体験などかつてはできたけれども今は実現が難しくなっている体験をしてもらおうと行われている。直近では、6月に同校プールのヤゴ救出をテーマに生物と環境の多様性の話を、7月には、付近の森(里山)での活動(あそび）を通した森の役割などを、体験とともに子ども達に伝えている。実演では、エネルギーをテーマに、ソーラーカーを使った活動を再現。教員でない者が授業ではない時間の中で何を伝えるのか、うまく伝えるコツは何かなどを具体的に説明し、参加者は、体感しながら小池さんの話に聞き入っていた。

7月18日の活動の様子

他チームの実践過程を知る

Future Green Networkは現在、3つのテーマによる4つのチームがそれぞれ研究を行っている。7月18日には、これら全チームが会しての全体会が新宿で行われた。先のチームの他には、企業が環境教育を組織の内外で実施することの意義、そして何を目指すのかを検討しているチーム、実際に小学校で環境学習プログラムを実施するチームなどが、それぞれの検討結果を紹介し、それぞれのチームの取組の状況を把握しながら、今後の展開について話し合った。